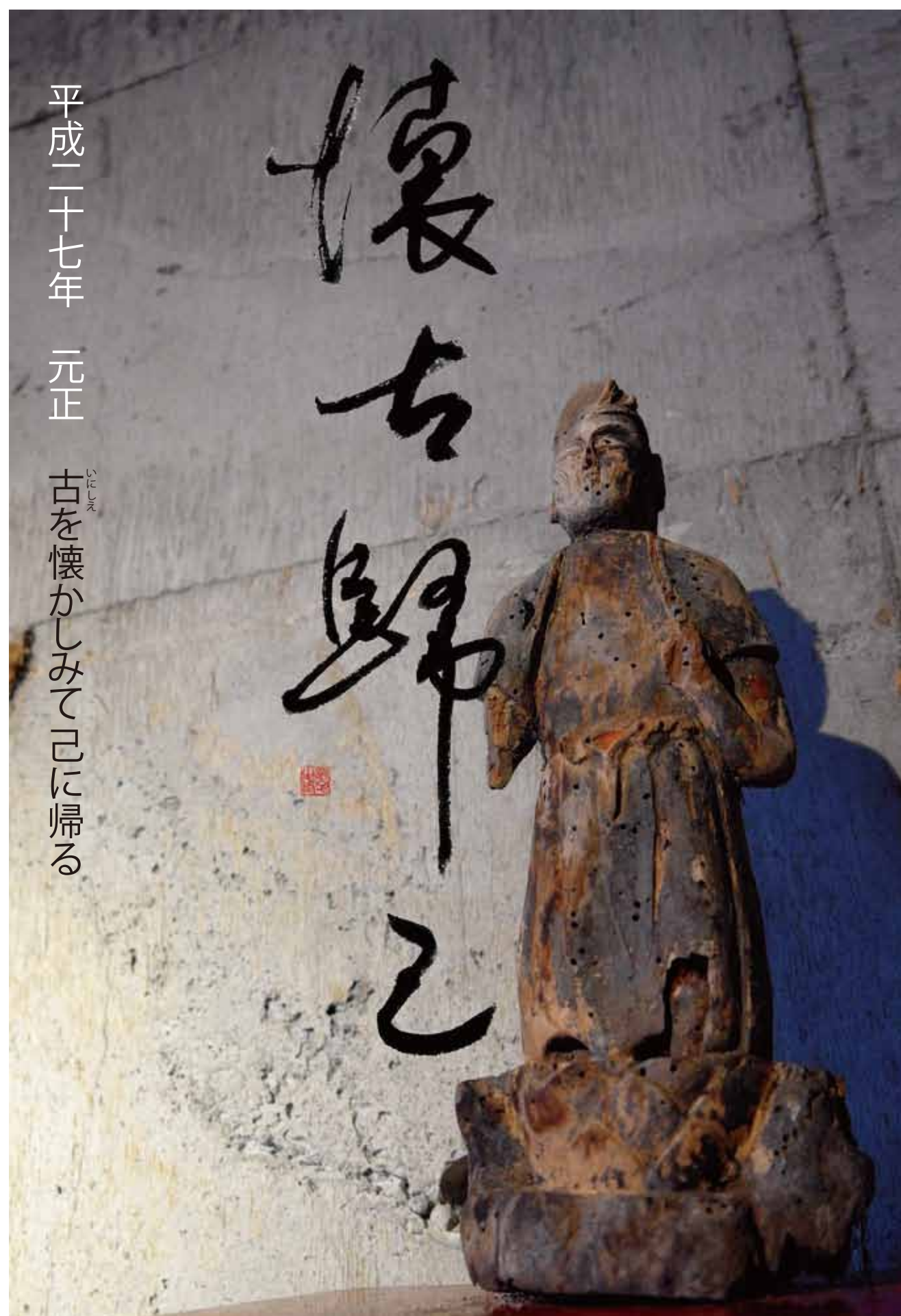




平安期木彫佛御開帳 1/9（金）～13（火）まほろば本店 2Fにて

三十と一年目となる今年、まほろばは、「懐しき未来」元年として再出発します。古き良き時代の自然と心、その遺産を、未来の子孫に手渡しします。美しき国造りのために、皆さまと共に……。辞いの日々が久しくありますよう、お祈り申し上げます。

まほろば
No.4033 15-08 1/9

〒060-0005 札幌市西区西野5条3丁目1番1
(株)まほろば (株)まほろば自然農園(有)アイズ

宮下 周平・洋子
役員・社員・従業員一同

年頭のご挨拶

年頭からまほろばで開催される「千家骨董市」。

その下見に、千田和子女史の店を訪問した際、見せて頂いた古仏がこのたび開帳となる。

彩は退色し、表はボロボロに剥げ落ちた木彫りの、その仏の面。

頭頂から鼻にかけて欠け落ち、両手も挽がれ、虫食いの痕が痛々しい半ば原型を止めない立像が、反って真の真を訴えているかのようだ。

無名の仏師、無名の菩薩。だが、その御顔は安らぎに満ち、物言わずとも辺りは静寂の気に充たされていた。

平安朝の作と聞く。

つとに1200年の歳月を一瞬に越えて、問いかける何か。

この感銘は、今の世になく、何処にもない、新しみでもあった。

訊ねようもない作者と千年の時を経て対話する。

作者の生き写しの菩薩が、語りかける何かか…。



飽かず眺めている自分。

その法悦、目

も覚めるよう

な感覚の中、

ふと心にある

字句が浮かび

上がった。

「懐古帰己

古を懐かしみて己に帰る」

古き菩薩像に対峙する

が、その実、私の心を

観ているかのような

今。

そう、古今はこの一瞬

に繋がった…、という

より、ここにこそある！

確かに、自己が、遠い

自己に帰している。

古都（奈良・京都）と北都

（札幌）も融けて、只こ

こにある。

自然と歴史の時空を

解き放つ、何かこそ、

「情緒」という絆。

この情緒こそ、生きと

し生けるもの達を繋い

でいる網、宇宙に遍満する心の煌きそのもの

ではないか。

古人は、これを菩薩心、如来の懐と呼んだ。

懐かしむとは、大宇宙の懐に帰ることなのだ。

その時、心の飢えを満たす、ある安らぎを

感じる自分を観た。

肉の身を養う食、心の身を養う食が、二つな

がらあることを今更ながら知る。

この物と心の食を一体として担うことこそ、

真の意味で「まほろば」の目指す所ではな

かったか。

懐古帰己

まほろば主人

宮下 周平

自然食・発酵食・伝統食を継承し、発展的に体系化した「まほろばオリジナル食理論」（Integrate Macrobiotic）……を広めることは元より、有形無形の文化継承、さらに普及発展もまたこれに劣らず、大切な役目ではなからうか。むしろ、車の両輪の如く、片手落ちでは、食の真相を捉えることは出来ないのだ。

ヘンプという古代にして次世代を繋ぐオイル。それを素に、さらに先端科学の超伝導フラレン構造を持つ鉬石をドッキングさせて伝統的油煙墨を再興させ、新生させる取り組み。

エッセンシャルオイルと伽羅沈香の香木を取り込み、西洋型パフュームに東洋的精神を介在させて日本文化として香水を逆輸出する試み。

古代より世界各地に点在する洗髪材を収



まほろば厚別店従業員一同

集し、さらに現代でこそ入手できる各種オイルを融合させて、嘗てないシャンプーを創出するなどなど。

伝統と前衛、過去と未来の狭間の中で、今をデザインし、クリエイティブに次代を開く。

文化芸術も、さまざまな分野の楽曲やパフォーマンスを通して、より人間的なありようを追求する場を提供して行きたい。単なる食の生産・流通・消費に終わるのではな

く、よりダイナミックに、よりオルタナティブに流動する店作りを展開したいと願うのであります。

まほろばが、30年一世を経て、更なる一世へのスタートを切る本年。

みなさまも、ワクワク・ドキドキしながら、新しまほろばと、楽しく嬉しくお付き合い願いたいと思うものです。



まほろば本店従業員一同+やんじー